【研究ノート】

善き芸術と悪しき芸術

—— 文学の場合 ——

小　林　信　行*

芸術作品として作られたものはどんなものでも芸術作品たりうるが、それが作品と見なされるからには評価がつきまとい、善い作品とか悪い作品と呼ばれるものが生まれる。この評価が時代状況によって変わることはごく一般的な現象である。芸術が人間の感性に負う部分をもつものと考えられており、そしてその感性がそれぞれの時代状況によって育まれるものである以上、評価が変わってゆくことは避けようもない。しかしそれにもかかわらず、時代を通じて生き残る作品、美術館や博物館に展示される作品は、比較的善い作品だということになっている。ここではその善い芸術作品だとか好ましくない芸術作品だと言われる評価基準の一つについて考えてみたい。[注 1]

1. プラトンにノーベル賞を

プラトンが芸術に敵対的であったことは有名であるが、他方でかれ自身がその文才故に優れた芸術的著作家と見なされていることも周知の通りである。たとえばプラトンの『饗宴』や『パイドン』といった著作は哲学的内容をもった対話篇文学として高い評価を受け、現代風に言えば間違いなくノーベル文学賞

* 福岡大学人文学部教授

を受賞することになるだろう。だが、芸術への敵対的立場を表明するとは言え、プラトンは受賞を完全に拒否できるのだろうか。というのも、かれは対話を哲学の重要な方法であると認識し、対話篇という著作形式を選択したとすれば、つまりそれを自らに許容する哲学の主要な表現形式であったとすれば、かれにとって文学賞を不適当だとして辞退することは困難ではないかと思われるからである。しかしまた、かりにプラトンが賞を受諾するとしても、プラトン自身はそれを哲学書として著しているわけであるから、その作品が自らは拒否したい創作部門（芸術）での受賞という皮肉な状況は残ることになる。すると、プラトンを芸術家と呼んでかれに賞を授与することはある意味でかれを侮辱していることにもなりかねない。中にはそのような人もいるかも知れないが、もちろん一般的には全面的賞賛であることを疑う人はいないだろう。

では、それはどのような意味での賞賛となるのだろうか。現実になされている賞賛を見てみると、さほどの出来でもない芸術作品が賞賛されることもある。しかしその賞賛は単に芸術に対する無知に起因していたり、未熟な芸術家を鼓舞するためのものであったり、あるいは上に述べたような皮肉や侮辱であったりする。したがってもしプラトンの対話篇を真なる意味で賞賛するとすれば、それは明らかにかれの作品が善いものであるという意味でなければならない。ただし、善き芸術であると考えられて賞賛されているにしても、いまはかれの著作を問題としているのであるから、その善さとはすぐれた文学作品としての評価だということになる。しかしはたしてプラトン自身はこの評価をどのように受け取るだろうか。それが芸術作品とされる以上、前述のようにかれは全面的にその評価を否定するのだろうか、あるいは全面的に肯定することはないにしても、部分的には、その賞賛は的外れなもの（つまり賞めるべきところを賞めていない）と言う可能性は残るのではないか。

この点を考えるためには、まずプラトンの著作がすぐれた文学であるとはどのようなことなのかという問いを検討しなければならない。たとえばアリスト

テレスやカントの著作を思い浮かべてみよう。かれらは悪文書きとして知られており、かれらの著作が芸術や文学として認められることはまず考えられない。しかしだからと言ってその悪名によってかれらの哲学が貶めるられることはまったくないし、これも当然のことながら、悪しき芸術家だと言われることもない。つまりかれらの著作は哲学的に卓越した内容をもったものではあるが、文学作品として書かれているわけではないのであるから、そのような観点からの評価はまったくの的外れとなってしまうわけである。

ここで比較のために、科学的内容を記述する言語表現について少し見てみよう。ソクラテス以前の自然哲学者たちを始めとするギリシャ・ローマの時代ならまだしも、明晰判明をスローガンにする今日の科学は、自らの研究内容を古代風の詩的形式で表現することをまったく拒否するか、あるいはそのような表現を採用してもせいぜい記述内容の装飾程度ですませるにすぎない。すなわち科学は文学ではないのだからその表現形式に拘泥する必要はなく、ただ科学的内容の合理的で正確な記述が求められるだけである。これはある意味で哲学の場合と同様であり、あえてプラトンのように対話形式をとらなくても、あるいは詩的な表現や比喩で複雑な事態に対処しようとしなくても、ごく一般的な散文による論述形式で十分であろう。哲学的著作も文学作品である必要はまったくないし、求められてもいないからである。

このように考えてみると、プラトンの場合はすぐれた哲学者であると同時にたまたま文章表現に秀でた名文家であったのだというごく常識的でありきたりな解釈に到達することになる。ところがこの考え方は、語られる内容（この場合は哲学）とそれをいかに語るかという言語表現とは区別可能であるとする立場に立つ可能性をふくむ。これはいったいどのような立場であろうか。いま用いた言語表現ということばの意味に関して、次の二つの事例を挙げて考えてみよう。

一つには、レトリック（弁論術、修辞）という意味での言語表現がある[注2]。

ギリシャ時代のレトリックは、弁論内容（たとえば無罪弁論とか法律提案など）の説得的な作文と演説、いわゆる言語表現法にあったと考えられている。これは知性の輝かしい発現と見なされ、それなりの評価を受けているものであったが、プラトンはその演技的側面に対する嫌悪感もあったであろうが、哲学的には敵視すべきものと考えていた。かれが文学を敵視する場合の論点は、それが真理や存在から遠いところで非現実的な幻を作り出して人間を欺いているというところにあるが、弁論術に対する敵視については、いまは『パイドロス』という対話篇にしたがって、弁論術の特徴の一つとされる両論可能性（antilogia）とでも呼ぶべき点に注目したい[注3]。ここで言う両論可能性とは、たとえばエロースは賞賛すべきものだという演説もできれば、それは非難すべきだという演説もできるということ、すなわちその論じられる内容がいずれの立場のものであれ、人間のこころを誘導する説得的な言論構成が可能だということである。つまり弁論術は、告訴する側に立つせよ弁護する側に立つにせよ、何らかの主張や判断にかかわるものでありながら、それについて自分が求められた状況に応じて肯定か否定かを説得的に論ずるにすぎないわけである。ここにプラトンが弁論術を拒否する最大の論点があるのではないかと考えたい。というのも、弁論家はいずれの立場に立つにせよ、主張される内容が真か偽かについて自身を何ら委ねるものではなく、それを巧妙に回避したり隠蔽しながら、その時々で聴衆を肯定や否定に導こうとしており、結果的には弁論家はある主張をなしておきながら、その主張の真理に対する不誠実さが認められるからである[注3]。もし以上のとおりであるとすれば、哲学者の芸術的著作を弁論家並みの言語表現と見なすことは、プラトンのみならず哲学者一般に対するひどい侮辱だということになる。プラトンは哲学の名文家であるという一般的評価があるにしてもは、それはけっしてかれが弁論家並みの哲学者だ、という意味であるはずはない。

では、言語表現のもう一つの例として詩作や小説はどうであろうか。たとえ

ば恋愛や性という内容をもった詩を創作する場合、その内容はごく一般的であり通俗的ですらあるので、誰でもが詩人でありうるが、しかしそれが芸術作品となるためには詩における形式的卓越性が求められる。このかぎりでは小説もまた、語られる内容がごく一般的なものであれば、言語表現の方に十分な注意が払われる必要がある。つまりいずれの場合も、その題材をどのように取り扱うかという問題もあるが、むしろ何よりもそこでいかなる言語表現がとられているかという点において源氏物語並みの小説が作られるかあるいは単なるポルノグラフィーが作られるかの違いが生じてくることになる。

2．文学的表現の卓越性

それでは文学の場合、その言語表現とはどのような意味なのだろうか。ここにも一見すると弁論術と同様の事情がありそうである。というのも、たとえばプラトンが『饗宴』で示したように、愛を肯定して賛美する文学もあれば、逆に否定して非難する文学も無数にあるし、また政治的イデオロギーの強い作家の場合に顕著であるが、反戦的立場から書かれたり、場合によっては好戦的立場を鮮明にして作品が書かれることもあるからである。そしてそれぞれの立場に応じた適切な表現法が求められ技法が駆使されることもさほど珍しいことではない。しかし文学もまた弁論術ではないのだから、むしろ内容面を重視しなければならない。とは言え、上のような主義･主張が文学の本質とされるとき、その作品はたいてい辟易とさせられるものとなってしまうことは多くの人が認めるところではないだろうか。さらに言えば、批評家が『イリアス』を戦争文学と見なすこともできるし、あるいは数多くの恋愛物語に政治的イデオロギーを読み込むことも可能であろうが、作家自らが作品にそのような主義・主張をすすんで盛り込むことは、芸術活動にとって自縄自縛的な面があり、これも幾多の駄作を生んでしまう恐れが多分にある。むしろ、たとえその内容が何らかの主張や立場を肯定もするし否定もするような矛盾に満ちたものであったり、

あるいは肯定も否定もなかったりしていても、文学作品としては十分に容認されうるし、そもそも弁論術と一線を画す文学は、何らかの立場に立って肯定的主張や否定的主張を述べる必要はないし、それが期待されているわけでもない。文学にはやはりそれ独自の表現技法があると考えたくなりそうである。

では弁論術や科学的散文とは異なる文学独自の表現技法として、たとえば写実主義だとか自然主義だと言われるもの、あるいはさまざまな文学ジャンルとして分類されているような様式（単に詩や小説という分類だけではなく、幻想小説だとかSF小説だとか哲学小説など）を考えればよいのだろううか。しかしこれらが文学の目的でありまた技法であると認めるにしても、それらが弁論術ほどにも体系化されるとは思われないし、そもそも批評家たちが好んで用いるそれらの分類は、文学創作の立場にとってはある種のいかがわしさを生んでしまう。そのいかがわしさとは、芸術があたかも工業生産品のように一定の型にしたがって生産されるような、まるでポップアート式の作品と考えられる恐れがあるからである。もちろん批評家たちの分類法が合理性を欠くとは言えないだろうし、作家たちがそれを一つの手法として創作することは現実的にはありうるだろう。しかしここではそのように技法化され量産化されうる文学活動を考察の対象としたいわけではない。むしろ、芸術を全体として見たとき、主義や主張を含もうと含むまいと、娯楽的要素を含もうと含むまいと、すぐれた作品とか善い作品を作り出すという重要な到達点がそこには認められており、それが芸術の評価ともなりうるのではないかと考えたい。このような到達点をもった作品については、その内容から形式におよぶ詳細な分析が批評家や研究者たちによってなされて来たし、今もなされている。ところがこれも周知のように、それらの分析の成果がすぐれた作品の制作を可能とするわけではない。もちろんそれらの分析から導かれる制作技法が一定の水準をたもつ作品を可能にすることもあるだろうが、それがすぐれた作品や善い作品となるかどうかは別問題である。というのも、言語芸術作品において注意すべき点として、創作

する人間の道徳性がつねに伏在せざるをえないという事情があるからである。文学において使用される言語は、彫刻や絵画において使用される素材と同等に考えることはできない。言語は誰もが呼吸するようにそれを用いて生きているものであり、したがって文学においては、人間の喜びも怒りも悲哀も困惑も確信もそこに自ずと反映された道徳世界が作品として描かれてしまうことになる。そして徳や悪徳に収斂せざるをえないさまざまな人間のあり方を、文学は読者に注視できるような形で見せつけるわけである。文学における到達点やすぐれた作品はそこに認められるのではないだろうか。それはたとえば従来の規格的な表現と比べると単なる斬新さとしてのみ気付かれるようなものかも知れない。他の芸術の場合であれば、斬新さは技法の革新や新分野の開拓となりうるが、しかし文学の場合、そこには人間の生き方についての重要な開示や示唆をふくむがゆえの斬新さとなるのではなかろうか。このように技法よりも到達点を重視して考えてみると、芸術とはなにか神的な狂気によるものであるというプラトンの有名な主張にならって、芸術には（とくに文学には）分析的で合理的な表現技法と見なされる方法性が欠如している、という立場に立つことが賢明であるように思われる。

ともあれ文学は弁論術ではなく、またそれ独自の言語表現ということにも曖昧さがつきまとうのではないかということに加えて、要するに創作されるものは真理や存在に対して無責任ないし無関心なのではないかという疑問点も残っている。その点が払拭されないかぎり、プラトンの文学的資質を賞賛することはやはりかれの哲学に好ましくない影を落とすことにもなる。ところが、文学や芸術が真理に対して無責任・無関心であるという点に関するプラトンの芸術批判は、前述の弁論術とは異なるもう一つの論点が注目されているように見える。すなわち弁論術の場合は、弁論家が弁論内容の真偽に自身は関与しない点に道徳的な不誠実さがあると指摘したが、それに対して芸術家はそもそも真理に対して無責任であるというのは言い過ぎとしても、少なくとも無関心・無頓

着ではあるように思われる。恐らくそのことが、プラトンの指摘する芸術の欺瞞性の内実をなすものであろう。すなわちその欺瞞性とは、芸術と真理の位置関係から生じるものである。芸術は真理からずいぶん遠いという空間的な比喩をプラトンは用いているが、それは同時に、あまり知性をはたらかせず、真理へ眼を向けないでいる人間（享受者）の位置も示している。そのような位置にある人間たちに、あるともあらぬとも言えないようなものを見せ、そこにおいて存在や真理の探究に向かわせることなく、とにかくなんらかの信念を形成させてしまう点に芸術批判は向けられているのである。ここには文学者と弁論家の、それぞれ自らの言論への関わり方の異なりがある。小説家は真偽ない交ぜに語りながら、読者にぼんやりとした信念を生み出させているだけであり、弁論家のように聴衆をなにか一定の判断へと導こうとしているわけではなく、まるで遊戯のように幻の世界を作り出しているものと見なされる。したがって、文学者や芸術家が真理に対して不誠実だとか無関心だと非難することは、かれらが何らかの立場から主義・主張をなして論争している場合ならば妥当かも知れないが、実際は手品のような見世物を見せて自分も楽しんでいるだけだとしたら、弁論家に対するものと同じ非難をするわけにもいかないだろう。しかしいずれにせよ、哲学者がたとえ文学者的であったとしても、かれが上のような欺瞞性を自らに容認することはないので、いま見た限りではプラトンは芸術家・文学者という自らに対する呼び名を拒否する以外にはない。

3．文学の教育的効用

さて、以上のように、プラトンは文学的な言語表現において卓越していたと解釈するかぎり、かれを賞賛してもかれには迷惑な賞賛にあたる可能性は残る。そこで次にプラトンにかかわる評判とは別の論点を取りあげたい。それはかれが『国家』おいて芸術批判と見なされる詩人追放論を主張する傍らで、詩人たちの作品を許容する議論も展開している点である。ここに哲学と文学の接

点を求めることはさほど的外れとは思われず、プラトンが芸術家としての評価を自ら受け入れる余地もそこにはあるのではないかという見通しが立ちそうである。

プラトンが文学を許容する議論は、将来において国家の守り手となるべき子供たちの教育論の中にある。『国家』で論じられるこの議論は一般的には文学に対する検閲論と見なされ、それゆえ好意的に受け取られるものではないが、逆にその検閲を免れる部分は、ホメロスやヘシオドスの文学作品であっても教育的効果を持つという理由で子供たちに聞かせてもよいことになる。したがってプラトンも自分の著作が教育的であるかぎりにおいては、文学という名を敢えて引き受ける可能性があると考えてもよいだろう。しかもこの種の教育論の延長線上には、勇気や節度や正義といったものについて子供のみならず大人をも対象とした＜哲学のすすめ＞と呼ばれる内容をもった伝道書や経典の類が登場することもありうるだろう。このような教訓主義は文学に限るものではなく、どんな芸術にも生じうる「使用」の問題である。もちろんこのような効用に注目することが文学自身にとっては問題を含むとしても、文学が教育的かつ道徳的含意を強くもっているという点は否定できるものではない。

ところでプラトンにとって文学の教育的有用性ということが認められるとしても、かれの教育概念がいかなるものであったかは確認しておかなければならない。すなわち、同じく『国家』において洞窟の比喩が語り始められる箇所によれば、教育（paideia）は基本的には人間の無教育な状態からの「向け換え」と呼ばれるものであり、自分の眼差しの方向を洞窟の奥の壁面から入り口の方へと転換させることを意味するものであった。そしてこの魂の向け換えと呼ばれるもののために文学が許容される可能性があったわけである。しかも、この視線転換の比喩は二重の意味があると考えられる。すなわちそれは＜無教育な状態＞から＜教育ある状態＞へという向け換えであるから基本的には教育論と呼んでも構わないが、その教育論は単に子供を対象としたものではなく、

むしろ学ぶもの一般にとっても、知的な改善の重要な出発点が述べられていると理解する必要がある。というのも、魂の方向転換が突然生じるもののように見えても、実は子供ときからの素地が必要とされるわけであるし、また成人してからもそれが何らかの形で反復され想起される必要があるからである。そして教育論の本質はむしろその後者にある。このような重層性は次のように言うこともできるだろう。すなわち人間の魂にとってこの方向転換は、一つには単に視線の向きを変えるということではなくて上方への方向転換であること、そしてそれ故に持続させることが困難であることが含意される。そしてこの箇所のまさに文学的と称すべきプラトンの比喩表現に倣って言えば、上方への視線の向け換えとその維持という教育論には、人間が本来は下の方ばかりを向いてしまうものだというかれの悲観的な人間理解が下敷きとなっているわけである。

さて以上のような意味で教育的に有用である限り、文学や芸術はプラトンに許容される余地があることになる。そしてこの教育による方向転換の先には善や真理や美があるという図式はおなじみのものであるが、その方向転換の契機を与えるものを「善い芸術」と呼ぶことにさほど問題はないだろう。もちろん他方では、たとえば人々に感動やショックを与え、日常性を打破して眼を見張らせるようなものが往々にして芸術作品として高い評価を受けることがあるが、しかしそれらが視線の方向を向け換え、人間の理解力を高めるものでもない限り、プラトンが許容することはないし、多分文化遺産として保存されることもないだろう。善い芸術は上向きの方向転換とその持続を可能にするものでなければならない。すなわち子供時代にはその読み聞かせによって記憶とイメージの定着が計られ、成人してそれなりの知性がはたらくようになってからは想起の手がかりとなるものでなければならない。それに対して、悪しき芸術とは視線を下方に向けさせ安住させてしまうもののことであり、プラトンの検閲に引っかかることになる。

ところがこの検閲は子供にとっては有効であっても、青年や成人にとっては

もはやあまり効果がないとも思われる。たとえば善き芸術とされている女性の裸体画や多くの文学作品さえもその享受者によってはポルノとなりうるとすれば、そのような場合には芸術作品の価値の相対性という議論がどうしても生じてくる。実際のところ、何故芸術の評価にはこのように困難がつきまとうのか。プラトンならば、前述のように人間は下を向きたがるからだと言うだろう。つまり、人間は自分の世界の中で自分のために見たがるのであり、そのとき善き芸術を堕落させてしまうことがあるからだ。実際、自分の幻想にまみれた生活の視線から離れることは困難なことであり、さまざまなすぐれた芸術作品もそのような人間にとっては刺激的ではあるが個人的な慰めになりがちである。これが芸術の悪しき享受・悪しき利用と見なされるものである。すべての芸術はこのように悪用される可能性をもっているが、だからと言って芸術の価値は相対的だと主張することは短絡的となろう。善き芸術は自分以外の世界を見せてくれるし、その上、芸術の特質として、自分の世界以外の存在を見る喜びも提供してくれる。芸術が上方を向かせることがあるとすれば、それは自分の世界以外の存在に真理の光を当てて気付かせることではないだろうか。

もしすぐれた文学にそのようなことが可能であるとすれば、それは真理を探究する哲学との幸福な一致とでも呼ぶようなものになるだろう。哲学の理性的な言語使用と、文学の想像的な言語使用はまったく別のものでありながら、先にも触れたようにときには偶然的な一致を見せることがあるということになる。もちろん、文学が真理探究を標榜することは作家や研究者の気概としては理解できても、僭越の誹りを免れない場合もあるだろうから、哲学と文学の一致は偶然としか言いようがない。ただし偶然とはいっても本当にすぐれた文学とか善き芸術と呼ばれるものは、結果的に真理探求的側面をもった作品となっていることは否定できず、それが芸術に一つの方向性を与えるものとなる。もしそのような方向性をもたなければ、芸術はその作り手の勝手気ままな幻想とそれに共鳴する無考えな享受者の逸楽的な遊戯になりかねず、プラトンの批判

がそのまま妥当するほかはない。善き芸術とかすぐれた作品が目指されているとき、芸術家の視線は真理探究者のまなざしをもっていると言えるだろう。しかし繰り返せば、その探求的視線がどれほど意識的であろうとあるいはなかろうと、そこには善き芸術にいたる方法的なものが稀薄だということは認識しておかなければならない。すぐれた芸術は神がかり的な狂気の一種であり、それ故方法性に欠けるところがあるというプラトンの指摘は、作品制作のための技術的問題を指すだけではない。むしろここでは、芸術には歴史的課題といったものが欠けているからではないかという点に注意したい。たしかに芸術や文学にも歴史は語られるが、それは哲学史や科学史とは別物であろう。哲学や科学には歴史的課題が意識されているが故に研究史があり、その研究史が哲学や科学の正統と逸脱とを区別することになるが、他方芸術の場合、もちろん各時代の様式といったものはあり、芸術の歴史と呼ばれるものは存在する。しかしそれは作品についての研究者や批評家の問題とはなっても、芸術家にとっての歴史的課題となる必要はない。前者のような真理探究といった課題のもつ方向性に制約されることはないわけである。むしろ芸術活動は自由気ままでいることをその本質としているのではないだろうか。

4．真理探究的文学

芸術が自由気ままを本質とする以上、そこには膨大な無駄が生まれるし、歴史的に見ればほんの一握りのものだけが善き芸術と呼ばれて残るだけである。このような状況の中、人間は子供の頃から多様な芸術的刺戟に引き回されながらも、善き作品やすぐれた作品に出会ったり自発的に目を向けることはきわめて稀なことだと思われる。文学や芸術にかかわるとき、ひとはそこで真理に出会うよりも、その幻想的魅力に惑溺してしまう危険性の方がはるかに高い、というのがプラトンの危惧であった。

ところで他方、学術的な真理探究に熱心に取り組む者に対して、たとえば「ベ

ルクソンばかり読んでいないで、たまにはプルーストでも読みなさい」といった類のことが助言されることがある。これはいったいどういう助言であろうか。天空ばかり見ていて穴に落ちる自然学者が、自分の足元さえ見えていないではないかと揶揄された故事を思い出し、そこに真理探究にかかわるなにか重要な事態が指摘されていると考えるべきだろうか。[注4]

人間にとっての最重要事を探求していると自負する哲学にとっては、上の助言はお節介ともなりかねない。（つまり、哲学には真理探究の必要十分条件があるという強い確信が内包されている。）しかしその探求に関して、ここで再び『饗宴』に戻り、ディオティマという女神官が美のイデアへ向かう上昇の道について語る場面を思い返してみよう。その道は同時に真理探究の険しい道のりでもあるが、そこに語られるのはあくまでも上昇の道であり、まなざしを上に向けようとする哲学的態度が鮮明に印象づけられ、それが対話篇の魅力ともなっている。ところが他方、『国家』で語られる洞窟の比喩には、上昇の道もあるが、昇り道はまた下り道の諺どおり、それは同時に下の世界にも通じている。人間にとってはこの上昇の道だけが自らの生き方を示す道徳世界となるだけではなく、下に向かう道にもまた同じ道徳世界は広がっており、人間は下方世界を自らの過去とし、生の織物を言語として織っていることを忘れるべきではない。

ここでまた科学研究と対比させてみよう。科学研究の重要性はその最前線にあると言ってよいだろう。たとえば物理学研究におけるニュートン力学は、歴史的興味から引用されるような場合を除けば、最前線にいる物理学者たちにとって特別の課題となるものではないだろう。ところがもし哲学の場合もそのように最前線にこそ哲学の最重要課題があるとすれば、とくに道徳世界の研究は手ひどい失敗を犯すことは目に見えている。というのも、科学主義的立場や楽観主義者でもないかぎり、ただ前に進むだけの歴史的進歩を道徳研究に認めることはまったく困難だと思われるどころか偏狭なものでさえあるからだ。た

しかに道徳についても科学の場合のような歴史的あるいは体系的研究が一つの課題としてありうるが、他方でそれが厄介な課題であるという認識も求めている点に道徳領域の複雑さがある。下方の世界という先ほどの比喩は、それぞれ個々人の知的展開にかかわるものであり、人類史上の過去を指すものではない。

そして道徳領域に対して哲学とはまったく異なるアプローチをとっているものとして文学がある。プラトンは、芸術的な創作を洞窟の奥底に映し出される影絵の作り手と見なし、その影絵に真理は求めようもないとして芸術を断罪した。たしかに創作者たる作家の言語生活は曖昧で一貫性もない感覚経験をともなったものであるがゆえに、読者にかぎらずかれ自身のまなざしも下に向くばかりとなってしまっているという批判は甘受すべきところがある。しかし他方、創作家もまた影を投げかけている当のものに気づくことがあるのではないだろうか。ほとんどの場合は影を投げかけているその実体にまで思いが及ぶような作品は生まれないにしても、ごく一部の真理探求的な文学、つまり洞窟の途中において悪戦苦闘しながら道徳世界を認識し説明しようとするかぎりは、文学もなんらかの形で真理への視線を保ちうるのではないだろうか。それは論理的で一定の道筋を辿るものではないにしても、洞窟の住人に取り憑く幻想を振り払い、想像力というものを頼りに真理を探求し開示しようとする可能性はあるのではないか。さもなくば、文学も含めて総じて芸術作品に古典は存在しえず、すべては考古学的な遺品かあるいは時代に即応した泡沫的な作品となってしまうことだろう。

さて、上に述べたことからすると「たまには小説でも」というさきほどの助言は、もっと広い視野をもちなさいという日常的な意味ばかりではなく、日頃の真理探究的態度が同時に道徳的な改善となるという効用を示唆していることになる。プラトンは文学の有用性を年少者について限定的に語っていたが、知性がそれなりにはたらく者にとっても、文学的言語使用に真理が開示され、道徳的な改善へと向かうことを認めてもよいのではないだろうか。もちろんその

助言は、誰にとっても必要とされるものではないと言われるかも知れない。しかし真理探究には過程があり、その過程が言語を通じてなされる以上、そこには奥行きや重層性があって、洞窟の外にある〈善〉への道をたどるのが哲学者であるとしても、かれがその道程の奥行きと重層性に最大限の気遣いを求められることは当然であろう。また、死を前にしたソクラテスの枕元に現れた夢は、魂が純粋にそれ自身となる浄化のいとなみ［哲学］を「ムゥサイの術」として勧奨するものであったが（Phaed.60－61）、それは音楽もふくめた学術文芸の総称であり、真理探究の総称であったとも考えられる。とすれば、やはり文学が真理探究にささやかな位置を占める余地は残されていると思われる。

［注1］　小論は、Iris Murdoch と Bryan Magee とのTV対話（Literature and Philosophy, 1977）から学んだことを書き留めたものである。同対話ついてはすでに小文を書く機会を与えられたが（The Iris Murdoch Newsletter of Japan, No.16, 2015）、ここでは別のアプローチからの補完を試みた。テキストは以下を用いた。

Iris Murdoch, Existentialist and Mystics. Writings on Philosophy and Literature. Edited by Peter Conradi, 1999

［注2］　James S. Murray, Disputation, Deception, and Dialectic: Plato on the True Rhetric（Phaedrus 261－266）, Philosophy and Rhetric, Vol.21, No.4, 1988

［注3］　この議論はあくまでも『パイドロス』で語られるプラトンの描き出す弁論術であって、それが後代のレトリック全体に当てはまるかどうかをここでは問題にしない。

［注4］　これは科学技術研究者たちが直面している、いわゆる研究倫理といった問題と同一視すべきではない。他の諸分野で問われている「～倫理」と同様、そこにおいて主として求められるのは既存の社会的規範との整合性であって、真理探究とは言われないだろう。